市民の、市民による、市民のための「隔月刊　ニュース　&　論説　レター」

自分のこととしてつながる、考える、実践する

市民環境ジャーナル

事務局ブログ　http://lowell.cocolog-nifty.com/gizen/　　2019 年 11 月 15 日付（第 14 号）　市民環境ジャーナル事務局

ジャーナル ML に投稿する　　skjournal@freeml.com　にメール送信

ジャーナル ML で討論する　　http://www.freeml.com/skjournal　にアクセス

投稿、コメント、情報提供、会員登録などで事務局にメールする　　minoue@nsknet.or.jp　に送信

巨大台風と伊勢湾台風　　連載「河川と社会」特集

今度こそ、台風19号を教訓に　減災 8か条の提案

寄稿　　戸田三津夫氏（静岡大学工学部大学院）

昨年は西日本豪雨、北海道地震で多くの被害がでました。地震で北海道全域では大停電が、台風 24 号により浜松でも大停電が起こりました。稀に見る大災害の年かと思いきや、2019 年の

今年は台風 15 号による千葉の大停電に続き、台風 19 号によるさらに甚大な広域水害が起こりました。今思えば、去年の災害をもっと深刻に受け止め全国的に対処すべきではなかったのかと思われます。本稿のこのあと、最近まで名古屋市博物館で開催されていて、私も拝見した「伊勢湾台風 60 年事業 特別展「治水・震災・伊勢湾台風」について「編集長の目」という記者ルポも掲載されますが、**そもそも、治水によって洪水を完全に抑え込み水害を防ぐことができると考えること自体、根本的に無理**があります。以下、私のこの持論について具体的に述べます。その上で、**ではどうするべきか**について、最後に具体的に8か条にまとめて提案してみたい。

お知らせ　－名古屋市博物館　特別展「治水・震災・伊勢湾台風」訪れて　6面

●北陸新幹線の車両基地、皮肉な思い込み

千曲川の氾濫では JR 東日本の新幹線車両基地が水没して 10 編成すべての車両が廃車となる見込みです。損害額 360 億円という報道が目立つ一方、農業被害はそれよりもはるかに大きいにも関わらず、ニュースバリューは新幹線の方が高いようです。また、新幹線基地は 2 m かさ上げしてあり、さらに 2 m かさ上げしていれば水没を免れたとも報道されました（**写真右。説明は文末の注記1**）

しかし、別の見方をすれば、そこはもともと浸水が予想されている地区なので、田畑は水をかぶって他への水害を軽減した一方、本来遊水池として機能していたはずが、2 m かさ上げした車両基地は遊水池としてほとんど機能せず、水害リスクをむしろ増大させたとも言えます。遊水池とすべき土地を、治水を過信して油断し、皮肉にも安全な基地だと思い込み使っていたとは言えないでしょうか。

●　治水対策には一定の明確な限界がある

地球温暖化のせいかどうかわかりませんが、確かに台風の勢力が拡大する傾向にあり、今年は関東周辺に相次いで台風が襲来しました。しかしこれを安易に想定外とすることはできません。体験したことのない大雨が降るのはあり得ることで、台風が立て続けに襲来すること

も十分あり得る事態です。

一方、治水対策には設計上明確に一定の限界があります。堤防を強く高くしても、地下に巨大な貯水空間を設けても、その能力を超える洪水が襲いくることは決して想定外の事態では済まされません。それは、現在の日本の国土の地形を見るだけで一目瞭然です。河川が山を削り、谷を穿ち、扇状地や平野を形成してきた形跡を見れば、人間のやる土木工事の規模をはるかに凌駕する水と土砂の動きがかつてあったと想像できます。様々な大きさの地震や嵐、洪水は必ず襲ってくるので、並みの防災、治水では、災害や水害を完全になくすことはできません。

● **ハザードマップは何のためにあるか**

本来、災害の頻度を下げ、被害を軽減し、

避難する時間を稼ぐことが、防災、治水の目的です。幸い水が溢れなかった場合には水害を防げた幸運に感謝すべきで、水害を完全に抑え込むことは現実には不可能で、初めからそういう想定はされていません。震度や液状化、浸水のハザードマップが作られているのも、減災効果を高めるための意味があります（**写真上。説明は注記2**）。

一方で、防災、治水機能を維持するには、常に構造物や施設の点検、補修が必要です。しかし、人間活動や経済が縮小してゆくにつれて、橋や道路や建物だけでなく、防災面でも費用と人手の問題などでこれまでのようには手が回らなくなってきています。例えば、河川でいうと、一定の治水機能を維持するためには、堤防の維持管理とともに河川の河床が上昇しないように浚渫などの工事が必要で、上流のダムでは継続的な堆積物の除去が必要です。これを怠ると、想定を大きく上回る流量発生時に、堤防やダムが水害を拡大することもあるのです。

水を流し、土砂を運び、生き物を育む河川の営みは壮大で、そこから人間に都合の良い水資源やエネルギーを得たとしても、河川の仕事をすべて人間が代行することなどは到底できません。

● **信玄と清正に学ぶ「動的平衡論」とは**

今、河川を持続的に利用することが求められようとしています。かつて、**武田信玄**は甲府の盆地に水害をもたらしていた釜無川（かまなしがわ）と御勅使川（みだいがわ）の治水を勢力的に進めました。**加藤清正**の熊本での治水も有名です。信玄の霞堤（かすみてい）を用いた信玄堤、清正の鼻ぐり井出（水路）など、無理に川の水を制するのではなく、水の動きをよく観察したのちに試行錯誤の末考案されたと思われます。**霞堤は洪水を受け流して被害を最小限にとどめ、鼻ぐり井出は常に土砂が堆積しないような持続的な運用ができる工夫**がされており、現在でもその機能は生きていて、メンテナンスは必要ですが、西洋から入った近代土木工法を、持続性において超えた技術であると言えます。また、彼らには、そうしなければならない絶対的なモチベーション（動機、理由）がありました。農業生産は国力の基盤、それを安定させるには治水が必要だったのです。つまり、自国の力を維持するための治水です。手を抜くわけにはいきません。全てが領民と自分自身に返ってくることを考えると、逃げ場はありません。

一方、現在の河川行政では、担当者や首長や地元政治家の直接の利害に直結していません。決して熱意がないとは言いませんが、数年後に異動したり、災害が起こるのが 100 年後の予想だったりすると、みんながみんな治水に心血注ぐ体制にはなりにくいでしょう。

人は初めから賢明には生きられません。痛い目にあって、教訓を得て賢明に生きてゆくことができます。近代土木技術が使われるようになって、土木技術者任せになったためにその営みが沈滞していないでしょうか。東日本大震災で目の当たりにしたように、巨大な防潮堤もケーソンも津波では簡単にひっくり返されます。ある予想では、現在の人間社会の形

跡も、人類が消え去れば 300 年後はほとんどわからなくなってしまうといいます。持続的とは、常に補修更新しながら現状を維持しているということで、福岡伸一さんが言う生命の営みの原理「動的平衡」と同じメカニズムで人間社会にも成立しているはずです。そのことが社会で広く共有されていないことは問題ではないでしょうか。

● **若者たちの「生きる力」育てる教育こそ**

自然の営みが身近だったころ、人は学問を学ばなくても世の中の道理や兆候に敏感でした。そして今、地理、地球科学、歴史、防災の知識は増大して、観測技術も情報伝達速度も格段に進歩しました。それを生かしきれる能力がずいぶん失われてきているような気がしてなりません。

日本の高校生が、理系であっても物理・化学・生物・地学のうち二科目しか学ばなくなってずいぶん経ちます。自分が生きる世界、地球、自然に関心を持って知ろうとする好奇心を失わせる教育が行われています。自己を深めるには、問題意識を持ちながら、書籍などの過去の情報に触れる機会、真に必要な情報を認識して探す能力が必要ですが、現在の教育はそれに程遠い現状です。豊かな想像力など養われることは、もちろん期待できません。このことも大きな問題であるように思えます

● **結論として提案　　ー　減災　8か条**

水害、災害の被害を減らすために、いろいろなことができます。

先日浜松市内で、水に関する講演をする機会があり、以下のような項目を提案しました（一部加筆）。例えば、避難方法一つとっても、広域甚大災害では多くの人が自動車での避難をしないことが大切です。東日本大震災の津波では自動車で避難していて命を落とした人が多くいました。一方で、介護が必要な人、高齢者、幼児などは自動車による避難が必要でしょう。自動車で道が塞がれてしまえば、緊急車両も現場に向かえず助かるはずの命も失われます。浜松市のような、人口に匹敵するほどの自動車台数のある街では、特に道に自動車を走らせない状況での緊急事態訓練も必要と思われますが、いかがでしょうか。

これまで地域の防災訓練に何度か参加しましたが、担当者の熱意とは無関係ながら、行政が考えたと想像されるシナリオに臨場感や実地に即した想定が感じられず、実効性がどれほどあるのかおおいに疑問を持ちました。あるいは、社会活動、経済活動の停滞を回避して、たとえば台風 19 号で問題になった夜間訓練など、そのような危険な訓練をしない方が良いでしょうか。考えたい課題の一つです。

減災　8か条

（1）　自治体ごとではなく、流域全体で考える
（2）　氾濫原（遊水池など）を確保し、リスクの高いところから離れる
（3）　ダムは大水には対処できず、消火器程度の役割であると認識する
（4）　水害防災の主体は、堤防強化と浚渫、河川拡幅と心得る
（5）　ダム自体も水害リスクになりうるとの認識を持つ
（6）　防災拠点づくり、重要施設の配置、連携強化など戦略的対策を立案する
（7）　想像力を総動員してシミュレーションする
（8）　可能な限り実地検証し、現実を踏まえる

注記1　社説「北陸新幹線水没　＜まさか＞に備えてこそ」紙面＝中日新聞 10 月17日付
注記2　「中小河川思わぬ脅威」紙面＝朝日新聞 11 月 12 日付。バックウォーター現象など被災の原因分析もまとめれている。

市民環境ジャーナル　編集局　発行

井上正男（ 浜松市中区佐鳴台3丁目3 -408 ）

yhr01702@nifty.ne.jp

053-489-9189

完成直前の砂丘ど真ん中　防潮堤　を点検する　中田島砂丘保全会議

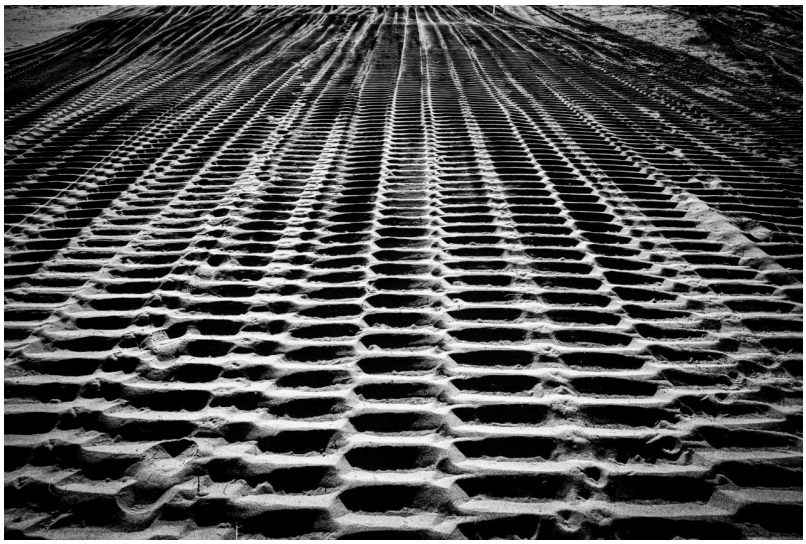
浜松市南区の市民団体、「中田島砂丘保全会議」（松下克己　世話人）は、遠州中田島砂丘の東西を横断する完成直前の住民の命守る防潮堤の出来具合の見学と点検のイベントを 11 月 10 日開催した。呼びかけに応じた約 30 人の参加者たちは、快晴の中、堤の頂上を歩きながら出来具合を点検したが、埋め込まれた頑丈な土台がはやむき出しになっていたり、ほころびが始まっていたりしていたことに驚いていた。以下の写真は、「崩壊と荒地」化の様子をクローズアップしたもの。この驚きの風景は、点検会後半の意見交換会（浜松市中田島幼稚園）では、風の舞う丘、中田島砂丘の消滅を予兆させるものではないかとの声も聞かれた。撮影＝木下孝司氏

防潮堤東端近くで

風の舞う丘、驚きの「崩壊と荒地」化、消える砂丘の予兆？

防潮堤を歩く

市民環境ジャーナル 2019 年 11 月号



平成の風紋

撮影　**コージ　キシタ**
（ 木下孝司 ）
砂山を重機でかき削ったキャタピラー式の中田島　平成〝風紋〟

連載　写真　　木下孝司

砂丘をゆく

中田島砂丘の昔話を語る会
長谷川武　=
海岸侵食災害を考える会

● **「令和の昔話」をつくる天竜川**

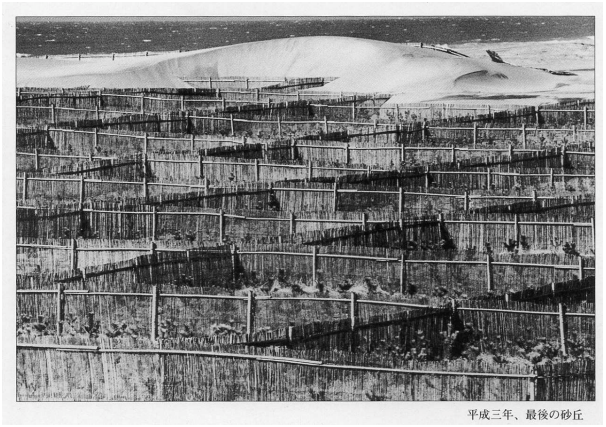
天竜川は竜を冠する川ですのでいろいろな言い伝えが有ります。天竜川の河口では、よく竜巻がおきました。そこで「天竜川」と名付けられた。昔話としては中々のもんだと思います。

さて、天竜川が運んでくる砂は御前崎、西は愛知県の伊良湖までの砂浜を形成しています。激流に運ばれた膨大な砂が中田島砂丘を造ってくれました。今は沢山のダムによって、流れは緩やかになり、運ばれて来る砂も激減してしまいました。砂丘は低くなってしまい、砂浜の幅は 100m以上も短くなってしまいました。上流のダムには貯水池が 90%近く土砂に溜まってしまったものも有ります。下流に流れるはずの土砂を止めてしまうダムは「暴れ天龍」を抑え込むクサビに思えてきます。

天竜川の殆どのダムは昭和 30 年頃に建造された物です。つまり還暦をとっくに過ぎて居る訳です。百年以上、コンクリーは大丈夫だと造った方は云います。百年まであと 30 何年、殆んどのダムが危うくなるのでしょうか？

そろそろ、クサビを緩め天竜川と塩梅良くやって行くことを考えるべき時が来た様に思います。何だか令和の昔話を作れそうです。

（**長谷川武**）



平成三年、最後の砂丘

昭和の風紋

砂山を借景に松の幼木を育てる垣根式の中田島昭和〝風紋〟　砂丘を育てる。

撮影　加藤マサヨシ
提供　海岸侵食災害を考える会

第 3 回「中田島砂丘の昔話を語る会」
語り手　大石力也さん= 左奥
– 白脇協働センター、6 月 14 日

市民環境ジャーナル 2019 年 11 月号

編集長の目　　災害を考える歴史への旅

名古屋市博物館　特別展「治水・震災・伊勢湾台風」を訪れて

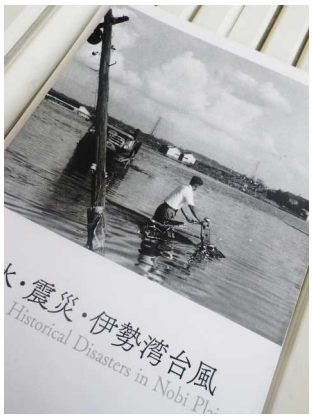
家族の死見つめ、生活再建支えあう被災者たちの共助、生々しく記録

●　市民がカメラで記録した台風被災

特別展は、二つのコーナーに分かれていて、順路の最初のほうは長良川などの木曽三川を中心とした治水や震災の歴史についての会場。残されていた巨大な絵図や大量の古文書を通して来館者にじっくり考えてもらうよう展示しつらえが工夫されていた。後のほうの順路は、5千人以上が犠牲になった60年前の伊勢湾台風(1959年9月)のパノラマもあるコーナー。市民が撮ったカメラ写真や、被災の子どもたちが鉛筆書きでつづった迫力ある記録の数々が並べられていた。

●　小学生たちの「台風記」

たとえば**右の写真**(天白川沿いの名南中学校グランド)。電柱が今にも倒れそうなグランドの中、教員なのか、腰近くまで水に浸かりながら自転車で生徒たちの安否を心配し見回っているのであろうか。写真を撮った市民はどんな思いで、この男性にカメラを向けたのであろう。さまざまなことが来場者の心に今も迫ってくる(写真は特別展「図録」表紙)。



さらには貯木場から流出し散乱する下流域の荒涼とした惨状を背景に木材に寄りかかり、泣くことも忘れたかのような呆然とした少年。説明によると、家族の中でただ一人生き残ったという。足元には妹が大切にしていた泥だらけの人形。この荒涼とした光景から、数十万トンとも言われる貯木場からの流木が家々を襲い、それらが「水車のように縦に回って」より多くの人々の命を奪ったことが想像できる。奇跡的に助かった多くの少年少女たちはまじかに父や母などの家族の死を見たに違いない。死を見つめた子どもたちの生涯にどんな影響を与えたのだろうか。そんなことを考えずにはいられなかった。

会場にはそんな出来事を記録した小学生たちの鉛筆書きの作文集「台風記」(白水小学校)も展示されていた。このほか、市民から寄贈された写真が多数展示されていた。

その意味で特別展展示の狙いは、まず、市民の、市民による、市民のための惨状の直視であると感じた。そこから、自分の命を守るのは自分なのだという日ごろからの一人ひとりの自助の意識を、カメラ写真や作文を通じて浮かび上がらせている。しかし、同時に自然災害に立ち向かうには、いかに人間一人ひとりは無力か、自助だけでは一定の限界があることもはっきりと提示している。災害に地域の人々は「共助」や「公助」でどう立ち向かってきたのか。そして、その歴史を具体的に知り、その後の災害にどう生かし、どう乗り越えてきたか。特別展にはその手掛りを、自分なりに、まず来場者みずから考えてもらいたいという強い意図も感じられた。

●「レンガの子ども」、共助の精神　ここに

その点で、老記者に強い印象を与えたのが、会場にも展示されていたが、「自助」を地域による「共助」で支えようとした母親たちと保育士たちの取り組みの記録『**レンガの子ども**』(河本ふじ江／原田嘉美子、ひとなる書房＝**写真**)だ。東京から被災者の生活再建支援に

駆けつけた保育士と生活再建に必死の母親たちによる仮設住宅での保育所活動である。この書名は「エエなー、レンガの家は、台風きてもこわれんで」と、保育中の子どもが童話「三びきのこぶた」を聞かされてつぶやいた一言が由来だったという。この活動記録について、特別展を担当した鈴木雅学芸員は特別展「図録」解説のなかで、今でも「被災者たちの置かれた恵まれない境遇と、より良い暮らしを求めて格闘するたくましさを記録した、災害史の名著としても読むことができる」と述べ、災害時の共助の一般的なありかたに通じる活動として高く評価している。事実、伝統を受けつぐかのように、今回の巨大台風 19 号でも、保育支援にかかわるある NPO 法人が大きな被害のあった福島で母親から子どもたちを預かり、後片付けに追われる被災者たちの汗だく支援の様子を伝える映像が流れていた。

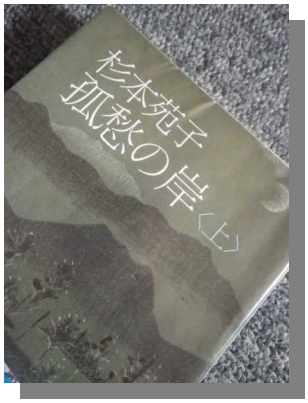
保育活動に限らないが、今回の巨大台風 19 号でも、抗い難い未曾有の災害時には人は誰でも勇気を持って自発的に、そして主体的に、助け助けられの共助、いわば「なにくそ」精神がさまざまなボランテイア活動を通じて自然な形で発揮されるものだという感動さえ覚えた。

● 三川分流「宝暦治水」、完成は明治中期

さて、共助も含めた江戸幕府、尾張藩、明治政府による公助としての濃尾平野災害史については、最初のほうのコーナー、特に木曽三川分流の大事業であった江戸中期「宝暦治水」に注目した。巨大な絵図（**写真**＝博物館玄関前パネル）や大量の文書類もあり、興味深かった。

このコーナーは、いわば時間的にも空間的にもマクロの視点で災害や治水をとらえようとしている。数年や数十年の時間スケールなら、個人一人ひとりはなんとか対応できるが、公助となるともっと長いスパンで対策を立てる必要がある。災害の全体像を正確にとらえ、長期にわたって記録することがいかに困難であるか。これらの文書や巨大絵図を見ながら思い知った。そこから、治水や減災、復興には、たとえば、洗堰など当時の人々のさまざまな知恵が組み込まれた構想図もまた重要であったこともわかった。

● 小説 『孤愁の岸』 のストーリー



この手伝普請の史実に基づいた詳しい研究については特別展「図録」中の解説「**「木曽三川分流への道」**（秋山晶則）」に譲りたいが、ここでは、この治水をテーマにした杉本苑子氏の直木賞受賞小説『孤愁の岸』（**写真**）について一言触れておきたい。

概略はこうだー。財政難にあえぐ外様大名、薩摩藩に突然、尾張藩内の濃尾三川の分流という治水の幕命が下るところから物語は始まる。露骨な外様つぶしと知りつつ、財政を預かる薩摩藩家老は、自決覚悟の悲壮な闘いに向け 1000 人規模の藩士を引き連れ、幕命事業の尾張に赴く。しかし、商人、農民、公儀などさまざまな利害や思惑が渦巻く中、莫大な借金をしながら治水工事に挑む。

小説はあくまでも小説。文学であり、史実そのままではない。このことを忘れて、これまで老記者は以上のような単純な 2 項対立的図式で宝暦治水の道を理解していた。ところが、史料研究にあたった秋山氏の論考はこの図式をたしなめ、結論として「幕藩体制のもと、複雑かつ厳しい環境に規定されつつ、地域全体で取り組まれたものであった」と断じている。その上で「川という自然と人間がいかに関わってきたか、史料に基づき、その全体像を冷静に見つめるべき段階に来ている」と今日的な課題も述べている。論考を読むとわかるが、宝

暦治水の史実は小説よりも、あまりに複雑。三川分流がなんとか完成したのは、小説の舞台から一世紀半後の明治中期だった。小紙では、今春以来「川は誰のものか　河川と社会」について大型の連載をしているが、かみ締めたい論考である。ある意味、ジャーナリストとして、博物館を訪れたもっとも大きな成果だったかとも思う。一読をすすめたい論考だ。

● **未来への旅　帰りのJR電車の中で**

台風 19 号の復興論議からもわかるが、現代の治水も、市民、自治体のさまざまな利害を調整し、そこから未来を指し示す国家百年の大計を生み出してこそ、成るもの。そんな公助観を宝暦治水から得た。歴史への旅とは未来への旅。帰りのJR車中、そう気付いた。

－　編集部から

『三河地震　60 年目の真実』について

今回の特別展では、転換期の大震災として濃尾地方を襲った幕末の安政東海地震（1854）と尾張藩、明治中期の濃尾地震（1891年＝明治 24 年）と明治のメディアについても取り上げられている。

メディアと大震災では、隠された震災として太平洋戦争末期の三河地震がある。1943 年 12 月 7 日に東南海地震が発生したが、その約 40 日後の敗戦の年、1944 年 1 月 13 日に起きたのが三河地震（M6.8）である。ところが、静岡、愛知、三重、長野県と広域に災害をもたらした東南海地震に比べて、三河地震は狭い地域に限定されていたにもかかわらず、犠牲者数が約 2300 人と東南海地震の 2 倍近い。

この地震では、軍部が国民の動揺を恐れてか報道管制を敷いた。このため県内の名古屋市でさえ、震度7の大地震に気づいた市民はほとんどなかったという。救援が得られにくい状況が犠牲者を異様に多く出した原因だと想像される。こうした実態をはじめて詳細に明らかにした著作が『三河地震　60 年目の真実』（＝　写真。中日新聞社）である。知らせてくれたのは、科学ジャーナリストで、元朝日新聞科学部長の尾関章氏。このことを含め特別展は多くのことを語りかけてくれている。

災害の歴史を振り返って

支え合って生きていける社会の参考に

鈴木　雅　氏

名古屋市博物館学芸員

この先いつ発生するともしれない大災害では、私たちがこれから先どのような地域、そして社会を築いていくのかが試されることになるだろう。もし読者にとって本書（特別展「図録」）が、平穏にくらせる安心・安全な地域、そして災害が発生しても、多くの人びとが支え合って生きていけるような社会を築くひとつの参考になるのであれば望外の喜びである。災害に直面し、その克服を目指した人々の遺産を継承していくためにも、伊勢湾台風をはじめとする災害の歴史を振り返り、明らかにしていく営みは、これから先も必要となり続けるだろう。　－（特別展「図録」より抜粋。**写真**＝　特別展会場にて、10 月 30 日）

市民環境ジャーナル　創刊に際して

自分事としてつながる、考える、行動する「市民の科学」をめざす
メーリングリストを組み込んだ「隔月刊　ニュース　&　論説レター」

●　バッドマン宣言　●　市民の側に立つ市民科学と問題解決のシビック・ジャーナリズムの融合

なぜ今、創刊に際して、融合宣言なのか。結論を先に言えば、第 1 は、今冬私たち市民団体が静岡大学構内を会場に「大学の軍事研究」にかかわる科学者と市民の対話シンポジウムを開いたが、そこで正統派の大学の科学とは別のもう一つの、市民の高い目線でものごとを考える、いわば「市民の科学」が必要であると痛切に感じたことである。第 2 は、6 年前の東北原発大震災によって日本の、公平・中立に立脚した正統派とされる巨大マスメディアが戦後一貫していかに国民の負託にこたえる国民の番犬役を果たしてこなかったかがあらわになったこと。第 1 の問題点を乗り越えるには、科学的な合理性を身につけた市民科学者を育てる必要があるが、容易ではない。ましてや、第 2 の国民の負託には、合理性に加えて問題解決に向けた社会的な合意形成のための論説性を発揮できる市民記者を生み出すことが不可欠だが、これまた簡単ではない。

その困難を承知で、正義のスーパーマンならぬ、もう一つの対抗的な正義のヒーロー、バッドマン(上記にロゴ)の心意気で、環境分野に挑むジャーナルをここに創刊します。　みなさん、つながり、声を上げ、行動しましょう。

佐鳴湖シジミプロジェクト協議会　/　市民記者　　井上正男　　2017 年 9 月

●　危機の 21 世紀、今こそ市民科学の時代

大学のプロ科学の方法を簡潔にまとめれば、価値判断とは無縁の普遍的な真理の探求という目的、要素還元主義という方法論、成果の論文第一主義である。これに対し市民の科学の方法は、社会的な評価が伴う実用の探究、生活者の感覚や目線の高さでヒューリスティックにアプローチする方法論、対抗的な価値判断が提示できるという評価第一主義である。

こうした点については、プロ研究者から市民科学者に転向した高木仁三郎氏の 21 世紀への遺書ともいうべき晩年の著作『市民の科学をめざして』(朝日選書)、『市民科学者として生きる』(岩波新書)がある。生活する市民目線で問題解決を図ることを目指すのが市民科学。立ち尽くす市民の側に立った、自分ごととして当事者意識をもった科学といってもいい。一言で言えば、市民の、市民による、市民のための科学が市民科学であり、出来事の局外に超然卓立するという「研究の自由」の立場はとらない。それよりも、社会的な視野に立って価値判断できる能力が求められる。

この点で、市民科学と軌を一にするのが、問題解決のためのシビック・ジャーナリズムである。現在の正統派とされているマスメディア・ジャーナリズムとの違いがよくわかるように、以下、通常のジャーナリズムの定義に、その違いを括弧( )内に明示してシビック・ジャーナリズムの定義を紹介する。

●　「局外に超然卓立せず」の共通性

シビック・ジャーナリズムとは、

① よりよい社会づくり(の問題解決)をするために
② 起きているありきたりではない出来事を、
③ (その出来事の局外に超然と卓立せず、自らも良識ある一人の市民として)批判精神をもって(かつ市民目線で)価値判断し、
④ その結果をニュース、あるいは評論として
⑤ より早く、より正確に、
⑥ より(公平中立主義から抜け出し)公正に、
⑦ 社会に伝えていく、
⑧ 言論(と対話による社会的合意形成)活動

のことである。市民科学とシビック・ジャーナリズムの親和性がここに読み取れ、それらの融合には大きな可能性があることを示唆している。

まとめると、市民環境ジャーナルは編集において

① むずかしいことも、ごまかさずに正確に
② 正確に書いたものを噛み砕いて、わかりやすく
③ わかりやすくしたものを、一工夫して面白く
④ 面白く仕上げた記事によって、市民自身が積極的に問題解決策を提案し行動できるよう、ほかの事実や評価との関連付けにも注意を払うこと

に心掛けます。　　以上。